

松任谷正隆の

僕のひとりごと

10

VOL.10 新居の思い出

新しい家が出来て引っ越しをすることになった。高校3年の時だったと思う。

残念ながら引っ越しの光景は殆ど覚えていない。

業者が殆どやったはずなのだが、その業者の中でも覚えていなければ、新居の第一夜のことすら覚えていない。
情けない限りだ。

とりあえず、新居は憧れの2階建てで、玄関を入ると階段室とダイニングに続く廊下、
廊下の左側には応接間の入り口のドアがあり、ダイニングの右側はキッチン、奥は両親の寝室だった。
階段室は前回話した通り、大きなガラス張り。通りの向こうからはさぞかしよく見えたことだろう。
登り切ったところに僕の部屋と弟の部屋、そしてもうひとつの応接間があった。
子供部屋にはクーラーがなく、夏には窓を開け放つか、あるいはクーラーのある応接間のドアを開け放って
なんとかしのいでいた記憶がある。

この応接間、だんだん僕が専用で使うようになったのは、ステレオだの何だのを勝手に運び入れ、
友人もここに通すようになっていったからだろう。

中でも、バンド仲間でもある同級生のKは、ここにほぼ入り浸っていた気がする。
会話の殆どはなにかの愚痴だったが、あまりもてないKは、
振られそうになる時には特にそれがひどく、朝までは確実にいた。

Kは英語が上手く、外国関係の企業に勤める夢を見ていたようだ。
当時から、交換留学の斡旋だかなんだかをやっており、
ある日、おまえもやらないか、と言う。
女の子ならいいよ、と言ったら本当に女の子がやってくることになった。



事前に両親に相談したか、あるいはそれが決まってから相談したかは覚えていない。

ただ、気がついたらカナダから来た、リンダという巨体の女の子がうちのダイニングに座っていた。

親父と、ちょっと話が違うよな、と言う顔で目配せをした。

外人、金髪ではあるものの、それ以外は想像とまったく違っていたのである。

英会話などというものをほぼ知らない僕と親父・・・、おふくろに至っては逃げるばかり。

そんな家にやってきたリンダは被害者だったかもしれない。

それでも、最初の頃はがんばってみんな話そうとはしたのだ。もちろん、片言の単語を並べるだけの話なのだが。

30分もそれをやると一同どっと疲れて、ついでにリンダも疲れて解散となるのだが、

リンダは2階のクーラーのある応接間を使っていて、夏どんなに暑くてもドアを開け放ってはくれない。

そりやそうだ。一応お年頃なんだから。

参ったなあ、なんて言いながら、

僕たちは蚊に刺されるのを覚悟で窓を開け放っていた記憶がある。

リンダが留学生仲間と出かける、と聞くと我々家族は一同ホッとした。

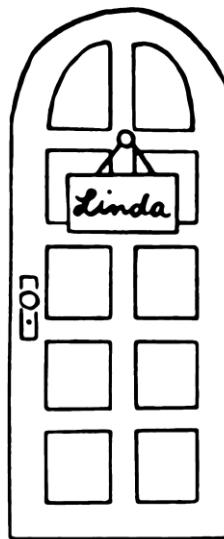
やれやれ、これでゆっくり出来る、というわけだ。

僕の新居の思い出はこうしてリンダとともに始まった。

そうそう、思い出ついでにひとつ目に焼き付いているものがあった。

それは物干し竿に堂々と干されたリンダの特大のパンティーだ。

隣に並んだ僕のパンツの倍くらいはあったと思う。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy